

比売久波(ヒメクハ)神社

佐藤 良士

1. 現地の掲示板の説明

比売久波神社 延喜式内社で、本殿は春日大社の若宮本殿を移築されたとされ、江戸初期の特徴をもつ社殿建築として奈良県文化財に指定。

祭神は久波御魂(クバミタマ)神、天八千千(アマハチチ)姫で、古来より桑葉をもってご神体としたので姫桑という。

隣接する糸井神社と関連して、この地

域は古代より、蚕産、絹織物の生産に関わっていた所であろうと思われる。また境内には大国主神社、事代主神社、春日神社がある。

拝殿と本殿の間には、東に隣接する島の山古墳から持ち出された竜山石(兵庫県高砂市付近で産出する凝灰岩)の天井石3つが踏み台として置かれている。



箕輪寺 比売久波神社の神宮寺。宗派は真言宗豊山派。比売久波神社の祭祀は箕輪寺の僧侶が関わっていた。

永享2年(1430)に筒井氏と箸尾氏の合戦により堂や本尊が消失し、永享8年(1436)に賢春法師によって本堂再建を果たした。

本尊として十一面観音菩薩を三輪・平等寺より譲り受けて安置した。

近年無住となり、本堂の老朽化が進み、1999年ついに倒壊、本尊の十一面観音、脇侍の四天王、地藏菩薩等は別の場所に保管されている。

川の向こうから 箕輪寺はついに倒壊した……?、「倒壊」とは穏やかではない。それも10年ほど前のことだ。そういえば、確かに比売久波神社の西側には古いお堂が建っていた。それにしてもここは、いつ来ても静かな淋しいところで、何だか広がっていると思ったが、あのお寺が無くなっていたのだ。

もう随分前のことだが僕がここに来た時、一人のお婆さんがお寺にお参りしていた。御婆さんは僕に気が付くと、「どちらからですか」と尋ねた。

「近いんです。大和郡山ですから川の向こうなんです」と、僕が言うと

「そうですか、私も川の向こうから来たんですよ」

川というのは、もちろん大和川だ。どうみても御婆さんは近所の人のように、歴史探訪の旅人には見えないが、と不思議に思った僕に

「もう何十年も前の昔々のことですけどね」と、御婆さんは川の方を見て言った。

2. 古代の織姫を訪ねて

神衣を織りたる姫 比売久波神社の祭神の天八千千姫ですが、神社の古い由緒書きに、「天八千千姫、桑葉を天の香久山に植えて、蚕を飼い、絹を織り、御衣にして供えた」とあり、機織（はたおり）に関係した姫神であることが窺えます。

また、天八千千姫は天棚機姫神（あまたなばたつひめのかみ）という別名で、アマテラス大神が天岩屋にお隠れになった時に、アマテラス大神に奉る神衣を織る姫神として神話に登場します。

古事記に、「アマテラス大神、忌服屋（いにはたや）に居まして、神御衣、織らしめたまふ時に……」とあって、この後スサノオが暴れる場面があるのですが、ここではアマテラス自身が自ら神衣を織っています。これは古代の巫女の重要な仕事として「神衣を織る」ということがあったということでしょう。

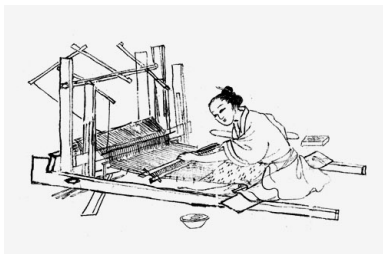
ところで問題は、天棚機姫神の「たなばた」と名前ですが、インターネットで次の記事を見つけました。

棚機（たなばた） 「たなばた」とは古い日本の袷ぎ行事で、乙女が着物を織って棚に供え、神様を迎えて豊作を祈ったり人々の穢れを祓うというものです。

選ばれた乙女は「たなばたつめ（棚機女）」と呼ばれ、川などの清い水辺にある機屋（はたや）に籠って、神さまのために心をこめて着物を織ります。そのときに使われたのが「たなばた」（棚機）という織機です。

そこで思い出されるのは七夕です。これは中国から織女と牽牛の伝説と、乞巧奠（きこうでん）という行事が奈良時代に日本に伝わって、元から日本にあった「たなばた」という言葉が合わさって出来たものです。乞巧奠というのは、「はたおり」の女性が手芸上達を願う祭で、これが7月7日の夜に行なわれたので、ここから七夕はこの日に行なうようになったといわれています。いずれにしても「はたおり」に関係した行事ということで、結びついたのでしょう。

山上億良の歌 この織女と牽牛の物語は奈良時代の万葉人のロマンを掻き立てたようで、万葉集には百首を越える歌が残されています。男と女の恋愛の比喻として恰好の材料になったのでしょうが、山上億良の次の長歌は、伝説の物語をそのまま歌っていますが、億良は遣唐使で中国へ渡ったので、たぶん中国の物語をよく知っていたのでしょう。



彦星は 織女（たなばたつめ）と 天地の
別れし時ゆ いなむしろ 川に向き立ち
思ふそら 安けなくに 嘆くそら
安けなくに 青波に 望みは絶えぬ 白雲に
涙は尽きぬ かくのみや 息づき居らむ
かくのみや 恋ひつつあらむ

（以下長いので省略。1520番です）

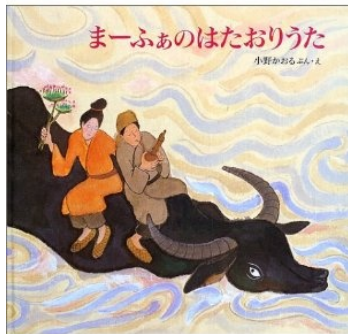
3. まーふぁのはたおりうた

たなばた伝説は、長い歴史の中で様々な民話や物語が生まれましたが元の話は次のようなものです。

織姫（織姫星）は天帝の娘で、はたおりの上手な働き者の娘であった。夏彦（彦星、牽牛）もまた働き者で、天帝は二人の結婚を認めた。

めでたく夫婦となったが二人は毎日が楽しく、織姫は衣を織らなくなり、夏彦は牛を追わなくなった。このため天帝は怒り、二人を天の川を隔てて引き離れたが、年に1度、7月7日だけ会うことを許し、その日は天の川にかささぎが橋を架けてくれて会うことが出来た。しかし7月7日に雨が降ると天の川の水かさが増し、二人は渡ることが出来ず、会いに行けない。

だからこの日の雨は、織姫と夏彦が流す涙といわれている。



彦星の名前が夏彦というのは初めて知りました。それにかささぎ（鳥の）が出てきて橋をかけてくれるというのは面白いですね。それにしてもこの話の牽牛と織姫は、要するに怠けもので、自業自得というものでしょう。

左は、この話を題材にした創作絵本の表紙です。絵も言葉も美しい絵本です。冒頭だけですがこれを最後に照会しておきましょう。

むかし、むかし あるところに、たいそう、うつくしい国がありました。

川のほとりに、まーふぁという、歌の上手なはたおりの娘がすんでいました。

くる くる くるり あさ糸を つむぎながら うたいます

とん とん ぱたり、はたを おりながら うたいます。

うたごえは風にのって、遠くまで流れていきました。川のむこうで、水牛といっしょに野良仕事をしていた あーふぁの耳にも届きました。

二 四の 糸には 月のひかりを

三 五の 糸には 星のひかりを

ながれる星は 六から 一に

「なんて美しい歌だろう。きっとやさしい娘に違いない」と、あーふぁは思いました。

あーふぁは、笙をとりだすと、まーふぁのうたにあわせて吹きはじめました。

「まあ、だれが吹いているのかしら。うつくしい ねいるだこと」

こんどは、まーふぁが笙にあわせてうたいます。こうしてあーふぁとまーふぁはとてもなかよしになり、毎日ゆうがたになるとあーふぁは水牛に乗って川をわたってまーふぁに逢いにいきました。 （以下省略）

（参考資料）「式内社調査報告」式内社研究会、インターネット